

東京大学大学院 人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣  
帰国報告（最終報告日 2012年9月29日）

**派遣生の基本情報**

氏名 松原 薫  
所属 人文社会系研究科 美学芸術学専門分野 修士課程2年（2012年派遣時点）  
派遣形態 平成24年度 夏学期 個人派遣（大学院生）

**研究課題名**

J. S. バッハ四声コラール研究——旋法・調性に関する18世紀音楽理論の観点から

**派遣先での活動**

(1) 派遣先の基本情報

国名 ドイツ  
都市名 ライプチヒ、ベルリン  
研究機関名 バッハ・アルヒーフ（ライプチヒ）、ベルリン国立図書館（ベルリン）  
コンタクトした主な研究者 ペーター・ヴォルニー博士（バッハ・アルヒーフ副所長）

(2) 派遣期間

出発日 2012年7月17日  
帰国日 2012年9月18日  
総日数 64日間

**主な研究成果**

(1) 当初の計画の概要

J. S. バッハの《四声コラール曲集》の成立、および18世紀後半における受容を当時の音楽理論を踏まえた上で考察し、《四声コラール曲集》が18世紀のバッハ受容にどのような役割を果たしたのかを検討する。具体的には、まずバッハの四声コラールの手稿譜、印刷譜、および同時代の他の作曲家によるコラール曲集を閲覧する。さらに18世紀に出版された音楽理論書の読解を通じて、《四声コラール曲集》の成立背景について理解を進める。

## (2) 実際に達成された成果

バッハ・アルヒーフでは、デジタル資料として公開されていないバッハの四声コーラルの手稿譜（弟子による筆写譜）、18世紀後半に出版された印刷譜、および18世紀の他の作曲家（テレマン、グラウプナー、ドーレス、ヒラーなど）によって書かれたコーラル曲集を閲覧し、その一部を複写することができた。これらの楽譜の序文、曲の順序、レイアウト等を比較検討することにより、18世紀のドイツ語圏でどのようなコーラル曲集がいかなる目的のもとで出版されたのか、またそれらとバッハのコーラル曲集の共通点、相違点を明らかにすることができた。

さらにバッハの作品普及に重要な役割を果たしたブライトコプフ社の楽譜出版カタログをバッハ・アルヒーフで網羅的に閲覧することができたのは、当初予想していなかった大きな成果だった。このカタログを詳細に検討することによって、18世紀後半に人々が好んで手に入れた作品の傾向（作曲家、ジャンル等）を知るとともに、バッハの作品がどのようなねらいで出版され、また受け入れられたのかを把握する一助としたい。

また、ベルリン国立図書館では、今まで入手困難であった18世紀の音楽理論書の閲覧、複写を行い、バッハ作品普及の理論的背景について理解を進めることができた。

バッハ・アルヒーフではペーター・ヴォルニー博士と面会し、今後の研究の方向性を考える上で大変貴重な助言を受けることができた。また滞在中は、テーマを同じくする外国の学生と資料交換、ディスカッションを行うなど、研究のネットワークを広げる上で有意義な交流を図ることができた。

## (3) 今後の研究展望

今回の資料調査から得られた知見に基づき、《四声コーラル曲集》を切り口として18世紀のJ. S. バッハ受容をテーマに修士論文を作成する。資料や文献と向き合う中で、このテーマが19世紀以降のバッハ受容の端緒であるばかりでなく、バッハの作曲技法や当時の音楽文化など、さまざまなトピックをはらむ多層的な研究課題であることが明らかになってきた。今後は一つ一つの事象を丹念に追究して新たな視座を切り拓くとともに、それらをバッハという大きな研究対象の中に位置づけるという作業を行っていきたいと思う。